
dead end

赤羽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

dead end

【Nコード】

N1089Q

【作者名】

赤羽

【あらすじ】

私は恋を自覚する。大人しくて空気みたいな彼への恋を。時を同じくして、私は早朝の学習室に出現するという謎の人物『学習室の君』に邂逅する。噂通り目を見張るような美形ではあるけれど、『彼は私が好きな彼に似ている。声も仕種も違うけれど、似ている。いや、同じ人だと思う。でも、そうすると、本当の彼はどちらだろう。』

01（前書き）

そう長くはないですが、続き書くまで間が開きそうなので一応連載で上げときます。

全部書けたら纏めるつもりです。

突然だが、私の学校には『学習室の君』という謎の存在がいるらしい。友達が言うには、七不思議とかではなくて確実に存在はしているんだけど、身元がまったく不明な男子生徒だそうだ。

曰く、始発でやってくる生徒よりも早く、学校の開く6時半に自転車ですchoolまでやって来る。

曰く、それから7時30分までの短い間だけ学習室で勉強する。曰く、その後は何処かへ颯爽と消え去り、行方は不明。

学ランを着ていることから、生徒であることは間違いない。しかし、彼の存在を独自にかつ念入りに調査した女子生徒によれば、全クラスを確認しても、彼の姿は発見できなかったということだ。

それだけなら、『学習室の君』というおかしな名前をつけられることなんてなかっただろう。ただのガリ勉としか思わない。

それが都市伝説のように語られる理由は、偏に彼の容姿にある。流れるように艶やかな黒髪。

儚げのグレーの瞳。

高く筋の通った鼻梁。

落ち着いた表情。

長身の細くも太くもない体躯。

シャーペンを滑らせる手。

立ち去る後ろ姿。

美しい容貌と所作を凝縮したのが、つまり、『学習室の君』らしい。

クラスで格好いいと持て囃されるような男とは格が違う、もはや王子レベルの美しさを持つことから一部ではプリンスの異名で呼ばれているようだ。

「……そんな人、いたら学校の有名人に決まってるじゃない」

「でも見つからないんだから仕方ないじゃない！」

放課後の教室で半ば叫ぶように、友人、竹内美優は言った。

正直、小学校から一緒の友人ではあるけれど、こういうことに関して私はついていける気がしない。美優は恋愛話になると燃える人だけど、私は……ええっと、凍る？ いや、それほど冷えもしないけれど、乙女の妄想もできなければ（「文化祭の前日に『覚悟しとけよ』って言われて、次の日、全体挨拶の時にマイクで『美優、好きだー！』って叫ばれたい」なんて、そんな恥ずかしいことよく思いつくよね！）、恋する人を積極的に応援することも苦手だ。あの人格いいよねー！なんて会話にも乗る気が起きない。

それに、そもそも、姉妹と従姉妹が文字通りオール女な私には、男っていうのは未知なものである。

「……それで、明日は始発で学校来るつもり？」

「うん。一緒に見に行こ……っていうか、リコはいつも始発じゃん。見たことないの？ 『学習室の君』」

「私、学習室より図書室派……」

「えー学習室行こうよー」

「明日は譲ってあげるよ」

「！ ありがとう大好きだよりコ」

「……現金だねえ」

繋いだ手をぶんぶん振る美優は女の子らしくて可愛い。何を隠そう、美優には先日、彼氏ができたのである。一目惚れが長い年月の末に叶ったときは、私までとても嬉しくなった。（なんせ、4回告白して振られてたんだから）

なので、美優が『学習室の君』を見たいというのはただのミーハー心からのだけけれど、まあ、学習室も図書室も勉強する環境としては上々だ。たまには気分転換にいいかもしれない。

ガラッ、

と、いきなり扉が開く音がして、私と美優は揃って振り向いた。

「あー、春日井くん、帰ったんじゃないの？」

「忘れ物」

返ってきたのは独特の声質だった。弱々しい、病的な掠れ具合。歌でいうハスキー、なんてものとは多分全然違う。小さな声は放課後の教室でなければ確実に掻き消されていただろう。

春日井くんはごっちゃごちゃした机の中を漁って、プリントを取り出したようだった。

「そっかー真面目だね！ バイバイ」

「あ、バイバイ……」

明るい美優の声と、思い出したかのように言った私の声。

「……バイバイ」

春日井くんは、はにかむような笑みを微かに残していった。その控えめな笑顔が、私は実は、誰にも言ったことがないけれど、堪らなく好きだ。勿論、loveでなくlikeなことは明言しておくけどね。

足跡が消え去った後、美優は再び口を開いた。

「春日井くんってさー」

「うん」

「……なんであんなのなんだろう？」

「……………」

曖昧すぎる上に失礼だと思うよ、その質問。

「詳しくどうぞ」

そう言つと、美優は許可は得たと言わんばかりにぺらぺら話し出した。

「だってさー春日井くんって黒髪で地味だけどハーフじゃん。ほら、2年の妹さん、有名な子、わかるでしょ？　ちよつと髪が茶色くてくるってしてて、目の色が薄めの綺麗な茶のお嬢様みたいな子！」
「あ、あーあの美人さん……帰国子女だから英語すごい話せるんだよね？」

「そうそう、この前さ、2年の留学生の子と話してるの見たんだけど、やばいよ。本当ネイティブって感じてびっくりした！　……って、妹のことじゃなくて兄だ兄。でね、妹さんがあれだけ、……まあ同性愛者だとかいう噂はあるけれど、あれだけ高クオリティーなのに、比べると春日井くんって残念すぎると思わない？　地味眼鏡だし髪ボサボサだし多分友達少ないし声ももっと張れよ！　とか思うでしょ」

確かに、比べてみればクオリティーの差は明らかだけど、別にそれは春日井くんが悪いとかそういう話でもない。

「別に……良くない？　どうこうしなくても」

「ええ！？　でも、血が繋がってるってことは顔立ちはそこそこいいんだから、勿体なくない？　眼鏡取ればいいのにとか」

「私、眼鏡好きだからあのままでもいいよ」

そんなことを言った時、美優の目がキラリと光った、気がした。

私、もしかしてまずいことでも言ったんだろうか。何か、彼女の恋愛センサーを刺激するような

「何？　その微笑みは」

「だってだって、リコが男のこと好きって言うなんて！　恋？　恋なの？　何時から！？」

「違う、男じゃない、眼鏡が好きなの！」

必死で弁解してみるけども、駄目だ、美優が燃えている。

「でも、それってつまり春日井くんが割とリコの好みてことじゃない？　どうでもいい奴なら、リコは何も言わないし挨拶だってするはずがない！」

「……う」

断言されてしまったけれど、確かに、それは真実だった。他の人なら、例えその人が美優と仲が良くて話し込んでいたとしても、私は彼がいなくなるまでひたすら沈黙を守り続けただろう。

「そう……なのかな……」

わからない。でも、仮に好きだったとしても、私と春日井くんなら平行線を辿りそうな気がする。接点は同じクラスってことだけだし、盛り上げられる話題なんて、多分ひとつもない。

でも……

「……やっぱ、ないよ、ない。それより、そろそろ電車の時間だけど、どうする？ 6時電にする？」

「え！ うわ、もうこんな時間！？ 今日5時電で帰らなきゃ」

「じゃ、私6時まで勉強してるから。バイバイ」

手を振ると美優は口を三角に歪めた。きつと問い詰めたくて仕方ないんだろう。考えが手にとるように分かる。

「つく……夜、メールするからね！ バイバイ！」

悔しそうに捨て台詞を吐きつつも、別れの挨拶をしてきたあたりがおかしくて、私は笑った。

でもって、夜。携帯から鳴った着信音はメールじゃなくて、電話のものだった。

もしもし？

リコ？ 早速本題だけど、結局のところどうなの？

……好きじゃない、と思う。

本当に？ 時々思ってたんだけど、リコってさ、春日井のこ
とただならぬ目つきで見てるよ

ただならぬ目つき？

ずばり、恋をしている目つき

嘘？

本当本当

……でも、別に、好きじゃない……

じゃあ、リコはいつも春日井の何処を見ているの？ 好きな
ところとか、あるんじゃない？

……強いて言えば、

うん

……笑った顔と、声と、顔と、真面目なところが、好き

……ちよい待て。え、それって、恋って言わないの？

言っの？

だって、学校でも言っただけど、リコは簡単に人を好きだなん
て言わないよ。そもそも、男嫌いじゃん

苦手なだけだよ

どっちでもいいけど、つまり、リコはその「好き」って気持ちをもっと大事にするべき。そしたら、それは恋に至るんじゃない……のかなあ？ 私、自分で何言ってるのかわかんないから突っ込みはなしね

んー……わかんない……

少し自分で考えてみて。私、そろそろ透との電話の時間だから

あー、はいはい。ラブラブなことで。それじゃあ、バイバイ。
ありがとう

じゃあねー

……という電話をしたわけだけど、自分の気持ちの判断はそう簡単にはつかない。

これが恋だとして、それから私はどうなるんだろう。恋と捉えるまでは、まだいい。でも、その先が分からない。

恋をした人達は普通、付き合うものなんだろうけど、私にはそんな気持ちはない。でも、私は彼に執着している。それを踏まえて改めて、この想いって、何？

私、初めて付き合う人は結婚する相手がいいな

かなり前、美優に言った言葉が思い出される。ただの理想でしかないことは重々承知だ。実際は、大抵の人はいろいろな人を見て、

いろいろなことを経験して、生涯を共にする人を決めるのだから。それを思い出してみると、私は彼を結婚相手として見ているということになるのだろうか。だとすれば、出会った瞬間に全ての人が運命的なものを感じない限り、それはきつと早計というものだ。その為には人をもっと知らなければならず、その前提として「付き合う」という行為があるはず。なら、春日井くんは私にとって、「付き合う」対象にはなりうるのか

「……………なりうる」

随分面倒な迂回だったけれど、結局のところ、付き合うとか、結婚ということを考えるくらいには、私は春日井くんが好きなのだ。

答えはあっさりしたもので、私は拍子を抜かれた。こんな簡単に、好きだと思ってしまうって、いいの？

いや、でも、私はまだ高校生だ。この時代、将来を見据えるにしても、子供の高校生でしかない。少しくらい軽くたつていいんじゃないの？ いや、軽くなるべき。いきなりそんな重いものを吹っかけちゃ、恋なんてできない。

私は、春日井くんが、好き。一旦そう思うと、急にその気持ちが染み込んでいった。早く明日になればいいのに、なんて、似合わないそんな期待をしてしまうくらい。

翌日、始発の電車の中で美優に会った。
「あれ、どうしたの？ 始発とか珍しい」

「……リコ、春日井のことで頭いっぱい『学習室の君』のこと忘れてるでしょ」

「あ」

かくして、私はようやく噂の美形のことを思い出した。春日井くんのことを指摘されたのに凶星すぎて、言い訳もできなかったのがなんだか悔しい。

でもついでに、言ってしまうおうと思って、私は昨夜考えた結果を報告する。美優はやたら嬉しそうに私の言葉に頷いて聞いてくれた。それを少し不思議に思うけれど、多分、美優が坂井くんについて話すとき、私もきっと同じように一喜一憂していた。

「でも、私どうすればいいんだろ……話し掛けるのとか、挨拶くらいしかできないし……」

「じゃあメアド聞いてみれば？ 私と一緒に聞いてあげるし。それからクラスのイベントごとに少しずつ送ってみるとかー」

「え、でもいきなりって不自然じゃない？」

「大丈夫だって。多分他に春日井狙ってる子なんていないだろうし、うん、リコと春日井ってお似合いだと思うよ」

「だといいけど……」

そう簡単に自信なんて持てない。そもそも、私はたいして明るくもない上に話すのも苦手だし、人に好かれるような性格じゃない。

ため息をつく。私は初めて自分の性格を呪った。

ローカル線に乗って到着した駅から学校までは、ほんの数分で着いた。進学校なだけあるのか、始発でも結構な人数が学校の玄関に吸い込まれていく。

この学校には学習室は二つあって、一つは受験生の3年生用で、もう一つは全学年共通のもの。両方とも本棟ではなくそれぞれ違う別館にあるのだけど、例の彼が出現するのは全学年共通の学習室で、実は玄関から一番遠い場所にある。正直、ピロティを通って行かなければならない意味が分からない。

早朝の学習室には生徒はほとんどいなかった。現在いる生徒は全員それらしかなかった。私と美優は入口がすぐ見える席を取り、入ってくる生徒を確認することにした。

美優は朝に弱い。時折こっくりこっくりしていたけれど、害もないので放っておいた。美形が入ってくる気配もなかったし。

今日の予習は終えてあったので、私は英単語帳を開いて暗記することにした。慣れが重なり、この時間帯でも眠くなることはもう殆どない。

そして、7時20分。

「来ないね」

「うん。えーいつもいるって聞いてたのに」

「私、やっぱり図書室行くよ。やっぱりあっちの方が慣れてるし」

小声で言いながらテキストを鞆に戻す。美優は少し顔を歪めた。

「……うん、わかった。ごめんね」

「別にいいよ。来なかった美形が悪いってことで。明日もここで張ってみよう？」

そう言っただけで席を立つ。美優はもう少しここに居るのだろう。彼女を置いて、静かに学習室を出た。

図書室はここから教室に向かう途中、中庭に繋がる廊下の先にある。図書室と学習室、それらの違いはいろいろあるだろうけど、私にとって一番の違いは景色だ。

図書室は机が窓に面していて、向こうには明るい中庭が見える。その景色が私は好きで、好んでこの場所に来るのだ。それに、受験にまだ余裕のある1年生や2年生なんか本を借りに来るときの、潜めた声が聞こえるのも図書室ならではの、展開される穏やかな空間に一体化できるような自由が、私は好きなのだ。対して、学習室

はカーテンを締め切っている上に沈黙が痛すぎるから、正直、余程切羽詰まってる時以外は行きたくないのが本音だった。勿論、美優が望むなら何時だって付き合う覚悟はあるけれど。

図書室は椅子の数も学習室よりは少ないけれど、実は割といつも空いていて、同時に使用するメンバーも大体が固定化されている。そして、使う席もまた。

私が使うのは窓に向かって一番前の、左から三番目。テーブルの端だから座りやすいし、一番隅っこでもないから孤独感もない。たまに気分転換は図るけれど、大抵はここだった。

「……あ」

だけど今、その席は男子生徒によって埋められている。仕方なく、私はその左のテーブルの、男子生徒から一番遠い席に座った。

鞆を床に置いて、教材を取り出して、一息。時計を見る。朝のHRは8時25分からなので、まだ1時間ほどあった。

そうやって時計を探った時、腕が筆箱を掠めてそれを落としてしまったらしい。ガチャ、とシャーペンやら消しゴムやらが床に散らばる。その内1本がカーペットの床を音もなくコロコロと、隣の男子生徒の傍まで転がってしまった。

筆箱の中身が立てた音に、男子生徒はこちらの状況を悟っていたようだった。少し椅子を引いてシャーペンを拾ってくれたのが、シャーペンを広い集める私の目に入った。

「あ、すみません」

「いえ、はい、どうぞ」

差し出されたシャーペンを受け取りながら、視線を上げる。息が止まった気がした。

「……」

春日井くん。

私はきつとそう言おうとしたんだろう。でも開きかけた口からは何の声も生まれなかった。彼だと見た瞬間にそう確信したのに、狂わせようとする要因に惑わされた。

春日井くんは眼鏡を掛けているはずだし、髪だってもうちよつと纏まってるし、それに、声だって、この人みたいにはつきりはしていない。でも、そこにある顔は私が好きになった、春日井くんのものなのだ。

「ありが、とう」

春日井くん、だよな？

逸らせずにじつと見つめていた瞳は綺麗なグレーをしていた。ああ、彼の瞳の色は何だっただろう。隔絶するような眼鏡の奥を、私は知らない。

男子生徒が再び椅子に座ろうとするのを、私は勢いのまま引き止めた。驚いた顔の男子生徒が訝しげに私を見る。

「あ……えつと、その、『学習室の君』って、貴方？」

グレーに見える瞳に、思いついて言った言葉だった。

「そう言われてるらしいけど」

「……今日は何で図書室？」

まさか肯定されるとは思っていなくて内心驚く。どうにかして会話を続けようと、浮かぶままに質問を投げ掛けた。

「ただの気分転換」

「……そっか……」

少し低めだけど意志の強そうな声は彼の端正な顔に合っているはずなのに、違和感が拭えない。

「それだけ？」

「あ、うん、ごめんなさい」

謝って、すぐごと席に戻る。

春日井くん？なんて聞くことはできなかった。

もしかしたら違う人かもしれない。でも、春日井くんには双子の兄弟なんていない。妹がなまじ有名だから、家族構成に間違いはな

いはずだ。だとすれば、彼は、何？ どうしても、全くの他人には
思えないのに。

少し経ってから、男子生徒は図書室を出ていった。私は疑問を抱
えながら、誰もいない席を見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1089q/>

dead end

2011年1月16日03時46分発行